

THE NORTHERN REVIEW NO. 34 所載 平成18年 5月31日発行

交感するコミュニケーションの再生へむけて
—ダブルオリエンテーションから脱出するために—

山 田 義 裕

交感するコミュニケーションの再生へむけて

—ダブルオリエンテーションから脱出するために—

山田 義裕

1 はじめに

野田正彰は、文化精神医学者としての長期間にわたる子どもや若者との面接の経験から、1980年代後半から日本の子どもや若者のコミュニケーション形態が大きく変わってきていると主張する。¹ 野田が注目するのは、表面的には社会的に振舞ってはいるが感情の交流は希薄で、感情は「自閉」的なファンタジーの世界で孤独に処理するという若者のコミュニケーションスタイルである。² 野田正彰はこれをダブルオリエンテーション（二重見当識）と呼び、この二つのオリエンテーション（見当識）が「瞬時に、無自覚的にコードスイッチング」（野田 2005:31）するのが現代の若者のコミュニケーションの特徴であると述べている。³

野田（2005:32）は、「キレル」子どもや「動機なき殺人」を犯す子どもの精神構造にもこのような特徴が見られるが、これは対人関係の認知障害とか脳障害ではなく、社会の変化を反映した「時代の病」であると主張する。

子どもや若者の倫理観や生活様式の変化がおとな社会から問題視されたり、時には厳しく非難されるのはいつの時代でもよくあることである。コギャルやオタクは社会の異物として白い目で見られ、ひきこもりやニートは社会のお荷物として問題視される。しかし、野田の言うようにダブルオリエンテーションが社会の変化に対する若者

¹ 野田（1986, 1988, 1994, 1999, 2005）を参照。

² 野田は「自閉」を次の特別な意味で用いていることに注意されたい。

自閉とは、E・プロイラーがフロイトの自体愛（Auto erotismus）の同義として、「内面生活の相対的、絶対的優位を伴う現実からの遊離」をこう呼んだものである。ひとり閉じこもってゲームをしているといった、俗に言う、行動特性としての自閉を指すのではない。それは自閉思考を定義しているのである。（野田 1994:89）

³ ダブルオリエンテーション（二重見当識）とは、慢性化した統合失調症（精神分裂病）患者の示すある症状である。野田（1986:236）は、この症状のある外来患者を例に次のように説明している。

彼は現実の世界の慣習、役割を十分こなしながら、次の瞬間には、彼のみの自閉的な妄想世界にチャンネルを変え、誰かからはなしかけられるなど現世の刺激が加わると、再び瞬時の内に約束ごとの世界にもどる。現世の世界の見当識と、彼が中心にまわる妄想世界の見当識を二重に持ち、それを見事に往き来しているのである。

や子どもの彼らなりの適応だとすると、彼らの「問題行動」をすぐに非難するのではなく、その前にまず目を向けるべきなのは、この数十年の間に日本で起こった社会変化やそれに伴う私たちの生活様式や意識の変容であろう。⁴

小論では、現代の子どもや若者に広く観察されるダブルオリエンテーションというメンタリティを、高度経済成長期から現在に至るまでの日本の社会構造や私たちの生活様式の変化の流れの中で捉えて、このメンタリティを生み出した社会的要因とその問題点、そして今後私たちの社会が進むべき方向について考えてみたい。

2 共同体の空洞化と砂粒化する個人

子どもや若者たちに社会的な問題行動が広くそして長期間にわたり観察される場合、その原因を彼ら自身の中あるいは彼らをとりにまく局所的な環境に求めるのではなく、彼らが今まさに適応しつつ生きている大人社会の変化にこそ注意を集中すべきであるというのが小論の基本的スタンスである。野田が指摘するダブルオリエンテーションにしても、これが長期間にわたり多くの子どもや若者を特徴づけるメンタリティとなっているのは、私たちの社会構造や生活様式の変化にその原因があると仮定する。

こう仮定した上で、この節では次節以降の議論の準備として、高度経済成長期とそれ以降の社会構造の変化、とくに共同体の解体、社会の情報化・消費サービス化が、私たちの人間関係やコミュニケーション形態にどのように影響したかを大雑把に押さえておきたい。⁵

日本では、1960年代の高度経済成長を通じて社会の都市化が進み、大家族や村落共同体などの古くからある共同体が解体していった。地縁や血縁といった近代的人間関係が希薄化していくなかで、核家族とよばれる小さなまとまりが「協同性の装置（栗原 2005:158）」として新たに形づくられ、育児や教育をはじめとする日常生活の基本機能は核家族単位で担われるようになった。核家族が一般化することで地域の「団地化」が進み、人はムラ社会的なしがらみから解放された反面、地域における人間関係はしだいに希薄になっていった。

核家族単位で団地に住む人々は、互いに助け合うための地域ネットワークを新たに構築するのではなく、1959年の皇太子の結婚パレード中継を機に爆発的に普及したテレビの影響で、近隣の間人間関係を通じてではなくテレビメディアから生活に必要な情報を得るようになっていった。テレビは人々の期待に応えるためにバラエティ豊かな生活情報を提供することで発展し、それによって人々はテレビへの依存度をさらに強めるという、テレビメディアと大衆の相互依存の素地が出来上がっていく。この相互

⁴ これに加えて、「いまどきの若者」論が印象批評に流れがちなことを考えると、子どもや若者の生活スタイルやその裏にある彼らの価値観や世界観についての実証的な調査も非常に重要である。1990年以降の若者の生活スタイルと意識の変化についての実証的研究としては、富田・藤田（1999）や浅野（2006）が参考になる。

⁵ 以下の議論は、主に栗原（2005:157-162）、藤原（1996:401-404）、見田（2006）を参考にした。

依存の関係が続くことで、家族は地域から孤立しながら内向きに閉じていき地域共同体の空洞化は一層進む。

伝統的共同体の解体にともなって生まれた核家族は、高度経済成長期前半は「新しい自由な愛の共同体（見田 2006：84）」として機能していたが、しだいに核家族内部でも地域において観察されたのと平行した分裂が進んでく。つまり、地域共同体のまとまりが崩れてそれぞれの核家族が地域で孤立していったのと平行した形で、家庭の内部でも家族のまとまりが薄れて、家族のメンバーは互いにバラバラに孤立していく。休日返上で働くモーレッツ社員の父親は家庭での存在感を薄め、一方子どもは勉強部屋と称する個室を与えられて部屋に閉じこもりはじめる。そして、1970年代後半、家庭に二台目のテレビが入るころには、勉強部屋にもテレビが置かれるようになり⁶、さらにそれにTVゲーム機が接続されるようになると、勉強と情報収集と遊びが自室で充足する子どもたちは、食事以外はわざわざリビングルームにいる必要はなくなる。こうして、地域と同じく家庭についても、同じ空間にいても関係は希薄という、いわば共同体から人間関係が抜け落ちる空洞化が進んでいく。

私たちは、共同体から距離を置くことで、そのしがらみから自由になることができる。しかし、共同体への帰属を失うということは、同時に外の社会から自分を守ってくれていた防御壁をも失うことを意味する。しがらみからの解放感は、個が孤立する不安とコインの裏表の関係にあるのだ。防御壁を失った個人は、ミーイズム（私生活優先志向）で一見気ままな生活を送りながらも、社会の過酷な環境に直接身をさらしながら、一人孤立する不安を感じ始める。

高度経済成長期から1970年代の共同体崩壊にともなうミーイズムと個の孤立は、1970年代末から1980年代にかけての情報社会化と消費サービス社会化により一層加速する。

まず、中曽根康弘政権（1982-87年）の新自由主義路線にそって1985年にNTTが民営化された。これを機に、コードレス電話の普及⁷による電話の個室利用が増え、またその後ポケベル・携帯電話などの移動体通信の利用が大衆化することで、電話を始めとする情報通信メディアを利用した非対面的コミュニケーションが大人から子どもまで急速に広まる。

この時期同時に、コンビニエンスストアの店舗数が増加して24時間営業も一般化し始める。コンビニはすぐそこにあり、いつ何時でも利用できる。空腹を感じたら調理済みのファストフードがいつでも簡単に手に入るし、生活必需品も雑誌も娯楽用品も一通り揃っている。コンビニさえあれば、日常生活を送るのに他人に頼る必要はない。こうして、消費サービスのコンビニ化は、人を当てにするよりもシステムに依存するメンタリティを社会に育てていく。

⁶ 浅羽（1991:245）参照。

⁷ 1987年にコードレス電話機が販売自由化。

高度経済成長期以降の社会構造の変化が私たちの人間関係とコミュニケーション形態に与えた影響は、大きく次の三つにまとめられる。

1. 共同体（伝統的共同体・核家族）の空洞化で人間関係が希薄化した（共同体の空洞化）
2. 電話の普及で非対面的コミュニケーションが急速に広まった（情報社会化）
3. コンビニエンスストアの急増で消費行為の自動化・マニュアル化が進んだ（消費サービス社会化）

次節では、1970年代から急速に日本社会に普及した電話に焦点を当て、電話メディアがそれまでのコミュニケーション形態を根本的なレベルで変容させるのに決定的な役割を果たしたことを議論したい。

3 電話メディアの誕生とコミュニケーション形態の変容

この節では、電話メディアの社会への浸透により、私たちのコミュニケーション形態がどう変容したかを考えてみたい。

3.1 電話メディアの普及

日本における電話メディアの普及のプロセスとその文化的・社会的影響について詳細に論じた研究に『電話としてのメディア』（吉見俊哉・若林幹夫・水越伸）がある。の中で、吉見俊哉は日本社会への電話の浸透について次のようにまとめている。⁸

吉見によると、日本における電話の日常生活への浸透は1960年代以降ということだ。⁹ 電話加入者数は、1960年代後半から増え始めて、1970年代入って爆発的に増加する。加入者数は1960年に360万、1965年に730万、1970年に1500万そして1975年には3000万と、5年毎に倍増している。また、このような量的拡大と平行して、1960年代後半から、電話網の重心が業務用から家庭用へと移行するという質的な変化も起こる。住宅用電話の割合は、1960年は12パーセント、1965年は25パーセント、1970年は45パーセント、1972年には54パーセントと業務用を逆転する。¹⁰

前節でテレビは1960年代に急速に普及したことに言及した。そして、上で述べたよ

⁸ 「第二章・変容する社会空間－電話が越境する社会」吉見他（1992:59-103）を参照。

⁹ ここで詳述する余裕はないが、吉見によると電電公社の電話網とは別に、地域単位で有線放送電話が1950年代から1960年代にかけて急速に普及して、村落コミュニティの通信放送メディアとして広く使われていたそうである。吉井他（1992: 76-87）を参照のこと。

¹⁰ 電話の急速な普及には、市外通話のダイヤル自動化という技術開発も一役買っている。吉見他（1992:85-86）によると、1950年代末までは交換手が手動で回線をつないでいたため、相手と通話できるまで非常に長い時間を要した。しかし、1956年に東京都心と周辺のいくつかの都市（横浜・川崎・市川・武蔵野・立川）間にダイヤル自動化が導入されて、市外局番を廻すだけで即時通話が可能となった。その後、市外通話のダイヤル自動化は日本全国に普及していき、市外ダイヤル化率は「60年の33.7%から70年には90.7%にまで急伸し、ついに79年、東京の利島、沖繩の大東島を最後に、地方農村まで含めた全国のダイヤル完全自動化が達成され」たということである。

うに、テレビから十年遅れて電話の利用が一般化する。テレビと電話という現代の二大メディアが、それぞれ1960年代と1970年代という近代的共同体が崩壊していくプロセスの中で急速に普及していったことは注目し得る。この二つのメディアが短期間の内に一気に大衆化したのは、空洞化しつつある共同体の穴を埋めてくれる何らかの補完機能を持っていたからとは考えられないか。そう仮定した場合、テレビと電話が代替した近代的共同体の機能とは何かという問いが立つ。藤原新也が『東京漂流』で述べている、日本の伝統的家屋における「神棚」と「縁側」の機能についての洞察を手がかりに、当時の人々が無意識のうちにこの二つのメディアに求めたものは何かを考えてみたい。

3.2 縁側と電話——ウチとソトとのインターフェイス

1956年、高度経済成長期が始まってまもなく、団地と呼ばれる集合住宅が日本に誕生した。その後日本住宅公団による団地の建築が組織的に行なわれ、また一戸立て新築住宅も画一的なプレハブ住宅が増え、その結果日本の一般的な家屋の構造は、この時期大きく変化した。藤原は団地化・プレハブ化前の日本の家屋の機能について、下記のような興味深い分析を行っている。

変革以前の日本の家屋構造は、機能的ではなかったが世間に向かって開放されており、自然環境の中で呼吸をしている生き物であった。

そうしたさまざまな変化の中で基本的に言えることは、家の構造が開放から閉鎖に向かったということである。人々の家はそのお互いが交流するものからお互いを遮断するものへと変容していったのである。その遮断とは人間関係の遮断にとどまらない。かつての日本の家の構造は、他人に向かって開放されていたとともに、自然に向かつて交流する非合理的な機能も備えていた。

それを象徴的に表すものは、「縁側」と「神棚」ということができよう。

(藤原 1995: 44)

神棚は「人間が自然や超自然なるものとの交流を交わす玄関」であった。また、縁側は「世間からの、やってきてもやってこなくてもよいような人がやってきて、そこでお茶を飲み縁をつくる場として機能していた」¹¹ 高度経済成長期あるいはそれ以降に建築された団地やプレハブ住宅からは、神棚や仏壇は消えるか隅に追いやられ、また縁側はこの新しい家屋構造の一部として維持されることはなく、殆どの新築家屋から姿を消してしまった。

構造物としての家は、独自の構造と機能を持つ複数の「モジュール」から構成される居住システムとみなすことができる。神棚にしても縁側にしても、家という居住システムを構成するモジュールの一つである。モジュール的システムでは（例えば脳がそうであるように）、その構造が変化してそれを構成するあるモジュールが縮小した

¹¹ 藤原(1995:44-45)参照。

り消失した場合、そのモジュールが担っていた機能が他の要素によって代替されることがある。

藤原 (1995:45) は、神棚が部屋の隅に押しやられた時、それに代わるものとして家の中心に置かれたのは白黒テレビの受像機なのだという。テレビ受像機は、自然や超自然へと通じる玄関として機能していた神棚や仏壇に代わり、世界へ通じる窓としての機能を新たに担い始めたというのが藤原の考えである。

縁側の機能的代替物が何かについては藤原は何も述べていない。縁側は、構造上は家のウチとソトとの境界にあり、ウチの人とソトの人がつかず離れずの交流を行う場として機能していた。縁側という構造物が消えた時に、ソトとの交流の場という機能を代替するものとして、当時の人々は何を選びとったのであろうか。高度経済成長期以降の住宅で、縁側の代替物として機能したもの、それはテレビから十年遅れて普及し始めた「電話」であるというのが小論の仮説である。

縁側がかつてウチとソトとをつなぐインターフェイスであったように、電話も、少なくともその導入期においては、玄関というウチとソトとの境界領域に置かれており、ウチの人は家屋構造の周辺部からソトの人との交信を行っていた。吉見他 (1992:64-76) は、導入期における電話機の置き場と電話メディアの特質について次のような興味深い指摘を行っている。

電話が家庭に普及してからしばらく、多くの家庭ではこのメディアを、玄関、それも下駄箱の上などに置いていた。このことは単なる偶然ではない。電話は、家族のひとりひとりを外部の社会へ接続させていくメディアである。われわれは電話をしているとき、物理的には家の中にいても、意識としては家から出て、会話相手と回線の上の場を共有してしまっている。つまり電話は、住居空間にとって玄関や勝手口と同様のもうひとつの境界なのである。だからこそ電話は、このような役割に最も相応しい場所、つまり家族という共同体が外部の社会と接する境界部におかれていたのだ。(吉見他 1992:64-65)

吉見は、当時人々が電話をウチとソトとの境界領域においたのは、無意識のうちに電話というメディアの本質を見抜いていたからだだと分析する。

縁側の置かれる場所は家の周辺部のどこかであり、一度家屋構造に組み込まれると、縁側は当然その位置に動かぬものとして固定される。しかし縁側の機能的等価物である電話は、導入期には玄関に固定されていたものの、物理的には移動可能な通信媒体である。同じウチとソトとを結ぶインターフェイスであっても、この「移動可能性」という点で縁側と電話は決定的に異なる。実際、電話はウチとソトとのインターフェイスという本来の機能を有したまま、どんどん家の内部へと侵入していく。

電話の家の周辺部から内部への侵入は、二つの段階を経て進む。まず第一段階として、電話は玄関から応接間・台所、そしてリビングルームへと家の中心へ向かって移動する。その結果、家の周辺部で行われていたソトとのコミュニケーションが、家の中心部、つまり家族団欒の真っ只中で行われるという、それまでになかった事態が発

生ずる。次に、コードレス電話や親子電話が開発されて二台目の電話機が利用可能となると、電話は家族成員の個室へと浸透していく。これが家の内部への侵入の第二段階である。これにより、例えば子どもたちが勉強部屋から、電話ネットワークを通じて、家の敷居を軽々と飛び越えて、直にソトへとつながることが可能となる。

このように電話が家の内部へと物理的に移動・浸透することで、家庭内の家族同士のコミュニケーションのあり方が大きく変化することになる。電話の家庭内部への侵入が、私たちのコミュニケーション形態をどのように変えていったかを、以下でそれぞれの段階毎に考えていくことにする。

まず、電話の家の中心部への移動の段階を考えてみよう。電話がリビングルームに置かれるなど家庭の中心部へ侵入すると、かつては玄関先など家族から見えない場でのみで行われていたソトとのコミュニケーションが、他の家族成員の目の前で、しかも彼らを無視した形で繰り広げられるようになる。この電話によるコミュニケーションは、とくに長時間にわたる場合は、他の家族成員にとって大きなストレスとなる。例えば、子どもがソトの友達と家の中心部で長時間コミュニケーションを続けるのは、親にとっては単に電話代金がかさむ以上に不愉快で時には腹の立つ行為である。家庭の中心部での電話によるコミュニケーションが不愉快な理由は何なのか。吉見は、それは「自明化された家族の共同性」が不安にさらされるからであると分析する。

こうして電話が、家庭の周辺部から中心部へ侵入してくるようになると、ここでの電話コミュニケーション、とりわけ子どもたちによるそれは、他の家族成員、なかでも両親との間に様々な摩擦を生じさせることになる。というのも、前述のように電話は、家族成員を直接、外部と接続させていくメディアであり、その際、電話をしている者と回線の向こうにいる相手との間には、ある種の声の共同性が成立している。この共同性は、それ自体は見えないものであっても、たとえば居間の片隅で受話器に笑いかける息子や娘たちの姿として、他の構成員には目に見えるものとして現れている。まさにこの光景が、食堂や居間で本来「成立しているべき」ものとして自明化された家族の共同性を不安にさらすのである。この不安は、電話をしている本人と他の家族成員、とりわけその中心にいるべきと考えられていた両親との間に様々な緊張関係を生じさせる。

(吉見他 1992:68)

家族がそろりリビングルームでの個人的な電話は、家庭という親密な物理的空間におけるリアリティと電話という電子ネットワークの中のリアリティとの衝突を引き起

¹² 長電話している当人も、この不安を感じていたようである。吉井他(1992:50)で、若林は1989年の「大学生の電話利用に関するグループインタビュー」を通じてインタビューを行なった学生たちの中に、「自ら「電話中毒」と言うほどに習慣的に長電話を繰り返しながら、長電話をした後でしばしば自己嫌悪や罪悪感を感じる」人がいたことを報告している。この居心地の悪さを避けるため、年頃の若者が長電話をする場合、個室に電話が置かれるまでの過渡期的段階では、公衆電話を利用することが多くなる。

こすのである。¹²

しかし、家庭のみならず職場でも、さらに公衆電話が普及すると都市部においても、「対面的な場所性の空間と非対面的な電子性の空間の二重化（吉見他 1992:19）」は極めて日常的な現象となる。さらに携帯電話が普及した現在では、対面コミュニケーションは、いつ電話によって中断されてもおかしくはない状態となっている。このように、私たちは現在、現実空間と電子空間が常に競合する錯綜したコミュニケーション状況を生きている。そして重要なのは、私たち一人ひとりが電話の普及以来、この二重化したコミュニケーション空間に無意識のうちに適応しつつあるという点である。

かつて家の周辺部に置かれていた電話がリビングルームという家庭生活の中心部に据えられることで、家庭内のコミュニケーション空間が二重化されたわけであるが、電話はその後にはさらに各家族成員の個室へと浸透していく。この家庭内部へ侵入の第二段階は、まず電話コードが長くなって電話機が家の中で自由に移動可能となったことがきっかけで始まる。電話が自由に移動できるようになると、子どもたちは自分の部屋に電話機を持ち込んで、勉強部屋から友達と長電話を始める。そして、その後開発された親子電話やコードレス電話の普及により、二台目の電話が両親の寝室や子供部屋にも置かれるようになると、個室から電話ネットワークを利用してソトの人とコミュニケーションをとるのは特別なことではなくなる。

縁側に代わるソトとのインターフェイスとして、かつては玄関など家の周辺におかれていた電話は、その「移動可能性」というもう一つの特性のために家の内部へと引き入れられた。まずは家族団欒の中心であるリビングルーム、次いで家族の個室へと引き込まれたのである。電話はこうして家の中に遍在するようになる。これは、言ってみれば家の中心部あるいは家族の個室にバーチャルな「縁側」ができたようなものである。家族成員のそれぞれが、自室に電話を引き込むことで自分専用の「縁側」を獲得し、そのインターフェイスを利用してソトの世界とつながる。その後、インターフェイスとして機能する情報通信機器は、ファクシミリやパソコンの登場で多様化するが、「個室内縁側」からのコミュニケーションは、この電話の個室利用に始まるのである。若者たちは、情報通信機器をコミュニケーションの基点にして、そこから自分独自の関係のネットワーク、野田（1986:163）の意味での「情報縁」を作り上げている。

4 社会のオタク化とダブルオリエンテーション

電子ネットワークを利用したコミュニケーションは、1980年代以降の急速なコンピュータ・情報通信技術の発達とインターネットのインフラ整備によってより多様に、そしてより便利になっていく。そういった社会の情報化を背景に、1980年代の中盤から電話などの情報通信機器を使った非対面的コミュニケーションの世界で生きる若者たちが急増する。「オタク」とよばれる若者たちである。^{13,14}

オタクを「コミュニケーション的な現象」と考える大澤真幸は、オタクたちについ

て、彼らは「自分と同じようなタイプの人間とのみ、つまり自分の直接の映し（鏡映）となるような相手とのみ、積極的に関係しようとして」「内在的な他者との関係にコミュニケーションのネットワークを内閉しようとしている」と分析する。¹⁵ このような同類の趣味趣向をもつ者たちが、仲間内で過剰ともみえる情報交換をするために使うツールが各種の電子的な情報通信機器である。彼らは自分の個室から電子ネットワークを通じてオタク仲間と「非対面的」につながる。

電子ネットワークを通じた非対面的コミュニケーションは、携帯電話の会話でもインターネットのチャットにしても、いつでもコミュニケーションから離れられるという意味で「降りる」自由がある。¹⁶ そのため、人間関係の「しがらみ」により自由を束縛されることは少ないかわりに、コミュニケーションを通じて感情的交流——これは「しがらみ」という容易に断ち難い関係から生まれることも多い——を行うことも難しい。

この「降りる自由」をもつ非対面的コミュニケーションの広まりは、虚構の世界で一人孤独に盛り上がるというオタク的感情表出と深く関係していると考えられる。非対面的コミュニケーションから「降りる自由」は、自分だけに特権的に与えられているのではない。コミュニケーションをキャンセルする自由は相手にもある。それ故、非対面的コミュニケーションは、コミュニケーション空間へのアクセスの容易さや気軽さと引き換えに、本来的に極めて不安定な特徴をもつのである。突如消失する可能性を常にはらむ不安定なコミュニケーション空間に身を置いたとき、私たちがこの空間消失の不安を解消するのにとる手段は大きく分けて次の二つであろう。

一つは、自分からは「降りる」権利を突如行使したりしないことを暗に伝え合うことで、コミュニケーション空間の安定を保とうとすること。つまり、「非対面」という「バーチャル」なコミュニケーションを対面的コミュニケーションのリアリティの

¹³ 大澤（1995:245）は、「オタク」が日本社会に登場した時期について次のように述べている。

では、オタクがこの社会に登場したのは、いつなのだろうか。事情に通じている論者たちは、だいたい1980年代の幕開けとともに、オタクが現れたと推定している。浅羽通明（1989b）の力こもった論考は、オタクの起源にあたるようなタイプの若い人たちが、70年代の末期に登場したとみなしている。すでに述べたように、コミケ（コミック・マーケット）を見て驚いた中森明夫が「オタク」という名を使ったのは、1983年のことである。

¹⁴ 個室内遊戯の最先端に行く彼らは、お互いを呼ぶ時に「オタク」という呼称を好んで使う。しかし彼らは、例えば主婦が互いを呼び合う時のように、〈お宅〉という家全体を意味する表現でその部分である家族成員（たとえば主婦）を比喩的に指す提喻として「オタク」を用いているのではない。オタクは話し相手を彼（彼女）の家族（＝宅）の代表者とみなして「オタク」と呼びかけているのではないのである。あくまで、話し相手を指す直接的二人称表現として「オタク」という表現を使っているのである。この「オタク」の変則的使用から、たとえ親と同居で個室をあてがわれている身でも、非対面的ネットワークのレベルでは、互いに「縁側」をもつ「家」の主人であることを確認しようとするオタクたちの無意識が読み取れないか。

¹⁵ 大澤（1995:244, 267）を参照。

¹⁶ 東（2004:137）参照。

延長線上に据えることを互いの暗黙の了解とする方策である。お互いがこの暗黙の了解をもつかぎりにおいて、電子空間においても現実世界のリアリティはかろうじて保持され、そこでは感情交流をとまなうコミュニケーションも可能となるであろう。

もう一つは、非対面的コミュニケーションにリアリティを求めるなど端から諦めることである。そもそも不安定な空間なのだから、そこでのコミュニケーションは表面的な情報のやり取りに限定すればよいと割り切るのである。この第二の対処法を選んだ代表がオタクではないだろうか。オタクは電子空間の非対面コミュニケーションを通じて、ときには過剰なほどに、互いの情報を交換しあう。しかし、そのコミュニケーションはあくまで表面的な情報のやり取りにとどまり、そこに感情の交流があるわけではない。非対面的コミュニケーションに見切りをつけた彼らは、コミックやロールプレイングゲームのような虚構の世界へ向けて感情の表出を行う。東（2001:138）は、1990年代のオタクでは、社交と感情表出が互いに関連せず、まったく別の層で行われていることを、ノベルゲーム¹⁷を例にとって次のように述べている。

ノベルゲームの消費は二層化されている。データベースの水準で生じるシステムへの欲望と、シミュラクルの水準で生じるドラマへの欲求である。前者ではオタクたちにも社交性が要求される。彼らは活発にチャットを交わし、オフ会を開いて、情報を交換し、二次創作を売買し、新作の評価について議論しあっている。しかし対照的に、後者では社交性は全く要求されない。彼らの物語への欲求は、きわめて個人的に、他者なしに孤独に満たされている。ノベルゲームは決して多人数でプレイするものではない。そしてそこで90年代に急速に高まった「泣き」や「萌え」への関心は、彼らがもはや、データベースを介して作られる擬似的な社交に感動や感情移入を期待していないことをはっきりと示している。

現実世界より虚構の世界にリアリティを感じて、虚構の世界で一人孤独に盛り上がるというオタクのメンタリティは、「降りる自由」をその本質的特性としてもつつ不安定な電子空間を生きる際の、彼らなりの適応の結果なのではないだろうか。¹⁸ 共同体の空洞化と新しいメディアの誕生にともなうコミュニケーション空間の劇的な変容に、オタクは時代に先駆けて先鋭的な形でいち早く適応した。このように生まれたオタクのメンタリティは、今の日本社会において、特に子どもと若者に広く蔓延し始めている。

¹⁷ 「かつてゲーム・ブックなどで試みられていたマルチストーリー・マルチエンディングの小説を、コンピュータ・スクリーン上で画像や音楽とともに「読む」ゲームのことを意味する」（東2001:110）

¹⁸ オタクとは異なり、電子空間に擬似的な親密コミュニケーションを求める人たちもいる。例えば、テレクラやパーティーラインを通じて援助交際を楽しむ人々などはその一例であろう。芳賀学は、この匿名の他者との親密なコミュニケーション空間を「1.5次空間」と呼ぶ。富田・藤村（1999:30）を参照。

その一つの現れが、野田正彰が指摘するダブルオリエンテーションのメンタリティを持つ子供や若者の割合の増大であろう。野田のいうダブルオリエンテーションとは、形ばかりの表面的社交の世界と自分が中心に回る妄想の世界を同時に生きて、その二つの世界を無自覚に瞬時にコードスイッチする精神状態である。これはまさに上で述べた東によるオタクの特徴づけとぴったりと重なっている。

ここまでの主張をまとめてみよう。共同体の空洞化で対面的コミュニケーションがやせ細っていった。それを補完するかのようになり、電話メディアを利用した非対面的コミュニケーション空間が誕生した。しかし、この電子的なコミュニケーション空間は「降りる自由」故の不安定な特性をもつ。この不安定さに対する対処法は二つ。一つは、この空間が「対面」の空間と同じくリアルであると思込むこと。もう一つは、この空間に感情交流をとまなうコミュニケーションを期待せず、別の世界——虚構の世界——にその価値を見出すこと。対人コミュニケーションの空間よりも虚構の世界にリアリティを求めた後者の道を選んだのがオタクであり、彼らは人との関係は表面的に済ませて虚構の世界で一人孤独に盛り上がる生き方を見つけた。そして、この生き方が社会に広まると同時に、そこに隠れていた問題が顕在化したのが野田の指摘するダブルオリエンテーションなのである。¹⁹

次節では、子どもや若者に拡がりつつあるダブルオリエンテーションのメンタリティが、携帯電話の普及以降、「繋がり社会性」（北田 2005）という特殊な形で現象してきていることを述べたい。

5 繋がり社会性とダブルオリエンテーション

3.2節で述べたように、電話が家庭内の個室——寝室や子ども部屋——へと浸透したのをきっかけに、若者たちは情報通信機器をコミュニケーションの基点にして、そこから電子ネットワークを通じて直にソトと繋がり、自分独自の「情報縁」を作り上げるようになった。さらに、1990年代末からの携帯電話の爆発的な普及ともない、情報縁へのアクセスはこの移動体通信から手軽に行えるようになり、電波さえ届く場所であればどこからでも気軽に仲間と通信できるようになった。

携帯電話の普及により、コミュニケーションの形は、若者を中心にさらに劇的に変化する。北田（2005:207）は、携帯電話が普及した後は、コミュニケーションは情報

¹⁹ 野田は、こういった精神状態の子どもの割合が6割を超えるのではという印象をもっている。そういう子どもの精神状態が、全国的に拡がって行って、かなり多数の子どもがそうなっている。特殊な少数ではなくて、数字で言うのは適当ではないし、強弱はあるけれども、六、七割がそうなっているのではないかと、という感じを受けます。（野田 2005:32）

²⁰ 大澤（2004:110-113）も、「情報内容はほとんどどうでもよく、互いに接続しあっていくということ自身が確認され、享受され」のようなコミュニケーションが、携帯電話の利用でしばしば観察されると、北田と同様の指摘をおこなっている。そして、この「コミュニケーションそのものへの過剰な志向性」は「近接性の感覚」つまり「遠く隔たったものの間の近さの感覚、他者の近接性の感覚」への欲求からきていると分析している。

の交換から「繋がり」を確認するための「自己目的的」行動に変化していると分析し、これを「繋がりコンソマトリの社会性」と名付けている。²⁰

しかし、90年代なかば以降、若者たちは、大文字の他者が供給する価値体系へのコミットを弱め、自らと非常に近い位置にある友人と《繋がり》を重視するようになる。重要なのは、その《繋がり》が「共通する趣味」「カタログ」のような第三項によって担保されるものではなく、携帯電話の自己目的的な使用（用件を伝えるためではなく、「あなたにコミュニケーションしようとしていますよ」ということを伝達するためにコンソマトリなされる自足的コミュニケーション）にみられるように、《繋がり》の継続そのものを指向するものとなっているということだ。（北田 2005:207）

北田の「繋がりコンソマトリの社会性」を考える上で、対人コミュニケーションの基本的機能について確認しておきたい。対人コミュニケーションには二つの機能がある。一つは情報の伝達である。多くの場合、ことばを使って、発し手は自分の考えや気持ちを受け手に伝える。コードモデル (code model) であれ推論モデル (inference model) であれ、多くのコミュニケーション理論が研究対象とするのは主にこの情報伝達の機能である。コミュニケーションは、しかし、常に特定の情報の伝達のためだけに行われるわけではない。ノンバーバルコミュニケーションの多くがそうであるが、自分の存在を手を振って知らせる場合や、「母子」コミュニケーションで観察されるクーイング (cooing) などは「自分はあなたとつながっている」、「自分はあなたに関心がある」ということを伝えているだけである。この場合、意味内容の伝達ではなくコミュニケーションをとるという行為自体が重要となる。やまだ (2005:74) は、コミュニケーションの原点は「情報伝達」ではなく彼女が「うたう」関係とよぶ共同化の営みであると述べる。

コミュニケーションの原点にたちかえてみよう。コミュニケーションとは、「情報」を「伝達」することだろうか。そのとらえかたは、通信やコンピュータ・メタファーによりかかりすぎていないだろうか。コミュニケーションとは、もともと「共通 (コモン)」とう意味をもつラテン語からきている。人と人のコミュニケーションは、人と人のあいだに「共通のもの」をつくりだす共同化の営みである。「共に見ること語ること」は、その根幹をかたちづくる行為であろう。

情報の伝達や意味の共有が背景化して《繋がり》を主たる目的とするコミュニケーションが増えているという北田の指摘は、《繋がり》のコミュニケーションが「母子」コミュニケーション（微笑の交換やクーイング）に典型的に見られる原初的コミュニケーション形態である点を考え合わせた場合に、非常に興味深い。

子どもや若者の頻繁な携帯電話の使用は、一見彼らの社交の活発さを反映しているように見える。しかし、それが北田の指摘するように、意味の共有や感情の交流ではなく《繋がり》を主たる目的とするものであるとするならば、彼らの過剰なまでの携

帯電話の使用は、むしろ彼らが「うたう」関係を土台とする他者との情動的・共鳴的コミュニケーションをいまだ血肉化していないことの裏返しとは考えられないであろうか。²¹

乳幼児は身近な他者（例えば母）との「うたう」関係の中で、その他者を鏡として自己を認識し始める。そして、「うたう」関係という身近な他者との共同化の営みの中で信頼のつぼみが花開き、その後いくつかの発達段階を経て他者への根源的な信頼感その子の身体に根付くのである。この「うたう」関係とその後の身近な他者との交流が不十分な場合、信頼のつぼみは花開かず、他者への根源的信頼が空疎なまま成長してしまうこともある。「繋がり社会性」という現象の裏に見え隠れするもの、それは「うたう」経験の貧弱さ故の空疎な信頼感を埋め合わせるため、必死に繋がり続けようとする人々の不安な群れのように思える。

「繋がり社会性」は、ダブルオリエンテーションの二つの見当識、すなわち活発ではあるが表面的な社交と「自閉」的な感情表出のうち、前者が特殊な形で現れたものであると考えられる。もしそうだとすると、ダブルオリエンテーションのメンタリティがどうしてこの時代の病理として生じてきたかを、「繋がり社会性」という現象を通じて考えるのは意味のあることであろう。

「繋がり社会性」の現象を通して見えるのは、身近な他者との「うたう」関係の欠落を補完しようと集い、繋がろうとする人々の姿である。ともに「うたう」ために不可欠なのは、もちろん「他者」の存在である。さらに、「うたう」コミュニケーションの特徴が、人と人が「情動を媒介に響きあうことで通じ合いをすること」（やまだ 1987:64）であるとする、その「他者」は見知らぬ誰かではなく「身近な他者」であることが必要だ。はたして、今の社会を生きる子どもにとって身近な他者と接する機会がどれくらいあるだろう。

日本の高度経済成長期とそれ以降の人間関係を、ここで再び考えてみよう。伝統的共同体の崩壊及びその後の消費サービス社会化の歴史は、子どもたちの周りから身近な他者が消えていった歴史でもある。核家族化で祖父や祖母とは別居となり、団地化で近隣の家との家族ぐるみの付き合いも少なくなっていく。さらに、社会の消費サービス化で、近所の雑貨屋はコンビニと化し、駄菓子を買う時の店のおばちゃんとの雑談はバイト店員とのマニュアル化された会話となった。さらに、社会の情報化は商品の流通を大きく変え、今や、店に出向いて人とコミュニケーションをとらなくても、ネットワーク経由で生活に必要なものを購入できる便利な世の中となっている。

このように、高度経済成長期以降の情報化・消費サービス化した社会は、かつて私

²¹ やまだ（1987:150）は「うたう」コミュニケーションは、母子などの二者関係に限らず、「祭りで拍子とりながら踊りで夢になったとき」などには、集団でもおこると述べている。プロ野球やJリーグに、試合そのものの興味より、ともに歌いともに感動することを目的に集まる群衆たちもまた、「うたう」コミュニケーションを渴望している人たちであろう。

たちが日常生活を送る上で当然のように利用していた「人と人との関係」を、どんどん社会システムの側へと繰り込んでいった。高度に情報化され消費サービスが行き届いた社会は、確かに便利な社会である。しかし、高度情報化・消費サービス化社会は、私たちに便利さ (convenience) を与えてはくれたが、それと引き換えに「共に生きる (convivability)」(イヴァン・イリイチ) ための仕掛けを私たちは失った。私たちの社会は、人を信頼し、人に希望をかけるよりも、システムの整備と充実に多くを期待する社会となっている。

肥大化した社会システムの影で身近な他者との「うたう」関係はやせ細り、それを補完するような形で「繋がり社会性」の現象が生じている。「繋がり社会性」がダブルオリエンテーションにおける見当識一つである「表面的な社交」の先鋭化した特殊例だとすると、この時代の病理への処方箋は、肥大化したシステムから私たちの共鳴的人間関係に満ちた生活を取り戻すことであろう。また、そうすることで、「自閉的な感情表出」というもう一つの見当識との乖離は解消され、二つの世界は感情交流をとまなうコミュニケーション、つまり「交感するコミュニケーション」の世界として統合されるのではないか。

6 むすびにかえて——エピメテウスの人間の再生

イヴァン・イリイチ (Ivan Illich) は、『脱学校の社会』(Deschooling Society) の最終章「エピメテウスの人間の再生」を、彼がニューヨークのおもちゃ屋で見つけたという奇妙な小箱の逸話で始めている。

今日の社会は、私がかつてニューヨークのおもちゃ屋で見た終末的な機械に似ている。それは、金属の小箱であり、スイッチを押すとパチンと音をたてて開き、中に機械でできた手がみえるのである。クロームメッキされた指が蓋に向かって伸びてきて蓋をひきおろし、内側から蓋に鍵をかけるのであった。それは箱であった。だから、人々は、その中から何か取り出せることを期待したのである。しかし、その中に入っていたのは、ただ蓋をするための機械であった。この仕掛けは、バンドラの「箱」の正反対のものである。(イリイチ 1977: 190)

エピメテウスの妻、バンドラは、ゼウスから渡された罪悪・災禍を閉じ込めた壺を開け、あらゆる悪をこの世に逃してしまふ。急いで蓋をした箱の中には希望だけが残る。イリイチは、近代人の歴史はこうして撒き散らかされた悪を一つ一つ閉じ込めようとして、「そのための制度づくりに努力するプロメテウスの人間の歴史」であると述べ、次にかこう続ける。

それは、希望が衰退し、期待が増大してくる歴史である。(イリイチ 1977:191)

イリイチは、さらに、「希望」と「期待」というこの似通った二つの概念の決定的違いを次のように洞察する。

積極的な意味において、希望とは自然の善を信頼することであるのに対して、

私がここで用いる期待とは、人間によって計画され統制される結果に頼ることを意味する。希望とは、われわれに贈り物をしてくれる相手に望みをかけることである。期待とは、自分の権利として要求することのできるものをつくり出す予測可能な過程からくる満足を待ち望むことである。(イリイチ 1977:191)

「期待」とは、自分たちが作り上げたシステムの中に内閉することで安心感と満足を得ようとすることである。「期待」が蔓延した社会では、人は新たに生まれる不安と不満を絶えずシステムを整備することで解決するよう求める。つぎつぎと生まれる不安を打ち消してくれるようなシステムの強化を人は無意識的に望む。システムが期待を満たしてくれれば、人を頼りにする必要などはない。システムへの依存を強めるということは、それ故、必然的に人への信頼を弱める結果となる。人が人に望みをかけない社会、システムに全てを任せる社会が、こうしてできあがっていく。

高度経済成長期以降、私たちの社会は、物質的な豊かさと生活の利便性を求めて、消費サービス化と情報化によるシステムの整備と強化を一貫して行ってきた。おかげで、私たちは多くのモノを手に入れ生活は便利になったが、それと引き換えにこの社会の人と人との関係——特に人への信頼と希望——は確実に希薄化していつている。この人間関係の衰弱は、身近な問題の解決にあたって、身近な人ではなくシステムに頼ろうとする人々の心性に典型的に見いだせる。小学校の校舎内に不審者が入って事件が起きると、全てのゲートを閉鎖していくつもの監視カメラを設置する、テクノロジーに依拠した危機管理システムが導入される。校舎を親や近所の住民に開いて常に出入りしてもらうことで、不審者の侵入を防ぐという、人への信頼をベースにした問題解決の方策は、アイデアとしては提示されても関係者の間で合意されるのはまれなことであろう。それは、人への信頼と希望よりシステムへの期待が、多くの人々の心を支配しているからである。

今の日本では、政府とメディアが煽り続ける社会不安の中で、システムへの依存が病的なレベルにまで嵩じてしまっている。メディアが次々と伝える事件——オウム真理教に始まり、少年や少女の凶悪犯罪のニュース等々——により市民の社会不安は膨らむ。これらの事件が起こる度に、犯罪の再発を阻止すべく制度改革が行われる。破防法や少年法が改正され、テレクラや出会い系サイトを禁ずる条例が作られ、はては歩きタバコポイ捨て禁止条例までが成立してしまう。このようなシステムへの依存は、結果的に住民の相互監視の状況を生み出し、互いの人間不信をさらに募らせるという悪循環を引き起こしている。

この人間不信とシステム依存の悪循環から抜け出すのは容易なことではない。伝統的共同体を復活させて、濃密な人間関係を取り戻すのだという主張に多くの人は賛成しないであろう。今私たちが謳歌している自由は、共同体のしがらみから解放されてようやく手に入れたものなのだから。また、私たちの生活を支えている諸システムへの依存を止めることも、個人レベルならともかく、社会全体としては難しいであろう。今の経済的繁栄と物質的豊かさは、システムの整備と充実があってこそそのものなのだ

から。個人の自由を最大限に確保し、現在の社会を支えるシステムを維持しながら、システムへ依存するのではなく人に希望を見出す社会をどのように構想するか。人に希望を見出す社会の創造は、まず人と人の感情交流をとまなうコミュニケーション、「交感するコミュニケーション」を回復することから始めなくてはいけないだろう。

高度情報化社会に生きる私たちにとって、コミュニケーションの場は、現実世界の「対面」空間とインターネットというバーチャルな「非対面」空間の二つがある。「対面」空間でまず行わなくてはいけないのは、私たち一人ひとりが、日々起る問題をすぐにシステムへと繰り込まない思考の構えを身につけ、人に信をおく問題解決の具体的な方策を考えて、それを実践することである。²² 一方「非対面」空間は、インターネットと携帯電話の利用がこの数年で一気に大衆化したことで、「対面」空間をしのぐ巨大なコミュニケーション空間へと変貌した。インターネットでは、参入離脱の自由と匿名性を悪用して、BBSやブログ等で特定の個人に対する攻撃が執拗に繰り返されたり、個人的妄想の世界で膨れ上がった憎悪を一方的に吐き出したりということが頻繁に行われている。こうして利用されるインターネットは、他者とのコミュニケーションの場とは言えず、ダブルオリエンテーションで典型的に見られる「自閉」的な妄想世界の延長でしかない。こうした妄想空間としてのインターネット利用はますますそのダイナミズムを高めてはいるが、私たちは同時に、インターネットが個人を地球規模で直接繋ぐコミュニケーション網として、現実世界のコミュニケーションと連携しながら効果的に機能しうることも既に経験的に知っている。「非対面」空間におけるコミュニケーションのリアリティを頭ごなしに否定せず、また国家や大企業などの巨大システムがこの空間を支配することに断固抵抗しつつ、それぞれの人がこの二層のコミュニケーション空間を自分なりに有機的に結びつけながら、「交感するコミュニケーション」を続けること。そして、それが社会を動かすリアルな力を持つ場合があることを実感することが、人への信頼と希望を回復する足がかりとなるのではないか。

一例として、2004年4月の「イラク日本人拘束事件」の際に、高遠菜穂子さんら三人を救出するために市民ネットワークが連携して行った一連の動きを思い出してみよう。彼らは、「自衛隊の撤退はない」と繰り返すだけの国家という巨大システムには目もくれず、自らのネットワークを通じて世界各地の市民運動の仲間とインターネットで交信しながら三人の居場所や安否についての情報を集めた。さらに、三人の人となりや彼らの家族の救援を求める声を中東を代表するメディアであるアルジャジーラ

²² やまだ（1987）の言うように、乳幼児期の「うたう」関係が「交感するコミュニケーション」の基礎だとすると、緊急に行わなければならないのは、子どもが、特に乳幼児期に、身近な他者と存分に「うたう」ことのできる状況を、親を含めた身近な人間関係の中で実現することであろう。しかし、現実には、劣悪なコミュニケーション環境で育たざるを得ない子どもも少なくない。育児から学校教育まで、社会が子どもとどう付き合うかを、「交感するコミュニケーションの実現」という観点から、じっくりと考える必要性を痛感する。

に送った。その様子は、アルジャジーラを通じてイラクの市民のもとに届き、イラクの市民もその声にはすばやく反応した。例えば、高遠さんが世話したイラクのストリートチルドレンは「ナホコが人質？僕を代わりに人質にしてナホコを解放してあげて」と高遠さんの解放を訴えたという。

人質救援のメッセージを送った NGO や市民グループは、イリイチの言葉を借りると、イラクの人たちの「自然の善」を信じて彼らに「希望」を託したのである。イラクの市民は即座にこのメッセージに応じてくれた。そして、彼らもまた私たちを信じ、私たちに自衛隊撤退への「希望」を託したのである。イリイチは、「希望とはわれわれに贈り物をしてくれる相手に望みをかけること」と言う。日本の草の根運動とイラクの市民が、国の頭越しに、互いに望みをかけ合うこの様から、電子空間における「交感するコミュニケーション」は、国家という巨大システムを内側からめくり返ししながら人と人とのネットワークを拡張、社会を動かしていく大きな可能性を秘めたものだと感じる。

イリイチは「プロメテウスのエートス」が希望を侵害している現在の社会で、私たち「人類が生きながらえるかどうかは、希望を社会的な力として再発見するかどうかにかかっている(191)」と言う。期待よりも希望のほうが価値があると考える人々、イリイチは彼らを「エピメテウスの人間」とよぶ。システムという強大な管理機構から逃れるためには、交感するコミュニケーションを回復しながら、一人でも多くの人がエピメテウスの人間として再生し、一人でも多くの「希望に満ちた」人間を育てることが必要である。システムへの期待へと内向してしまった私たちでも、彼らの存在に気づきさえすれば、再び自分の力でこの社会に「希望」を見出すことができるはずである。

参考文献

- 浅羽通明 (1991) 『天使の王国「おたく」の倫理のために』 JICC 出版局
浅野智彦 (2006) 『検証・若者の変貌—失われた10年の後に』 勁草書房
東浩紀 (2001) 『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』 講談社現代新書
藤原新也 (1995) 『東京漂流』 朝日文芸文庫
藤原新也 (1996) 『沈思彷徨』 筑摩書房
藤原新也 (2000) 「少女は時代の波打際立つ」『新潮』1月号, 237-247, 新潮社
Illich, Ivan (1971) *Deschooling Society*. Marion Boyars Publishers. (『脱学校の社会』 東洋・小沢周三訳, 東京創元社, 1977)
北田暁大 (2005) 『嗤う日本の「ナショナリズム」』 NHK ブックス
北田暁大・香山リカ・辻大介 (2004) 「「ケータイ的」なるもの」の論理と心理」『世界』2月号, 岩波書店, 162-172
栗原彬 (2005) 『「存在の現れ」の政治—水俣病という思想』 以文社
正高信男 (2005) 『考えない人—ケータイ依存で退化した日本人』 中公新書

- 見田宗介 (2006) 『社会学入門—人間と社会の未来』岩波新書
- 宮台真司・東浩紀・西垣通・神保哲生・水越伸 (2006) 『ネット社会の未来像—神保・宮台マル激トーク・オン・デマンド III』春秋社
- 野田正彰 (1986) 『都市人類の心のゆくえ—文化精神科学の視点から』NHK ブックス
- 野田正彰 (1988) 『漂白される子供たち—その眼に映った都市へ』情報センター出版局
- 野田正彰 (1994) 『コンピュータ新人類の研究』文春文庫
- 野田正彰 (1999) 『気分の社会のなかで—神戸児童殺傷事件以後』中央公論新社
- 野田正彰 (2005) 『この社会の歪みについて—自閉する青年, 疲弊する大人』ユビキタ・スタジオ
- 大澤真幸 (2004) 「もう一つの「ハイデガー, ハバーマス, ケータイ<解説>」ジョージ・マイアソン (武田ちあき訳) 『ハイデガーとハバーマスと携帯電話』103-126, 岩波書店
- 大澤真幸 (1995) 『電子メディア論—身体のメディア的変容』新曜社
- 富田英典・藤村正之編 (1999) 『みんなぼっちの世界—若者たちの東京・神戸90's—展開編』恒星社厚生閣
- やまだようこ (1987) 『ことばの前のことば—ことばが生まれるみちすじ1』新曜社
- やまだようこ (1996) 「共鳴してうたうこと・自分の声がうまれること」菅原和孝・野村雅一編 『コミュニケーションとしての身体』(叢書・身体と文学第2巻) 大修館書店
- やまだようこ (2005) 「共に見ること—語りこと—並ぶ関係と三項関係」北山修編 『共視論 母子像の心理学』講談社選書メチエ
- 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸 (1992) 『メディアとしての電話』弘文社